

## 第42回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会 「グローバル時代の文化理解」

2016年11月2日、国際言語文化センター主催にて、第42回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会が甲南大学2号館1階グローバルゾーン・ポルトで開催された。「グローバル時代の文化理解」という総合テーマのもと、イリノイ大学東アジア言語文化学科長・宗教学科准教授であり、2016年度甲南大学国際交流センター「Year in Japan プログラム」レジデントディレクターであるブライアン・ルパート博士が講演を行った。講演のタイトルは、「世界文化遺産としての東寺百合文書や京都寺院文化圏」で、参加者は26名であった。

- ◆ 開催日時 2016年11月2日（水） 16時30分～19時00分
- ◆ 受付時間 16時00分～16時30分
- ◆ 開催場所 研究会：甲南大学2号館1階 グローバルゾーン・ポルト  
懇親会：甲南大学2号館1階 グローバルゾーン・ポルト
- ◆ 次 第
  - 16：30 開会の挨拶 国際言語文化センター所長 教授 津田信男
  - 16：40 講演（日本語）
    - [司会] 国際言語文化センター 教授 トーマス・マック
    - 「世界文化遺産としての東寺百合文書や京都寺院文化圏」
    - Manuscript Culture, Japanese History, and Buddhist Monasteries:
    - Kyoto Area Temple Culture and World Heritage
    - [講師] ブライアン・ルパート博士
  - 17：40 質疑応答
  - 18：00 まとめと閉会の挨拶 国際言語文化センター 教授 金 泰虎
  - 18：10 懇親会

### 講演

[講師] ブライアン・ルパート博士

本講演は、昨年京都東寺百合文書がユネスコ世界記憶遺産に登録された記念に行った講演を基にしたものである。

### <東寺百合文書の特徴>

東寺は世界第一級の中世史料のアーカイブであり、約18,700点（約27,700通）を所蔵している。94個の桐箱に入っている文書であることから、百合（ひゃくごう）文書（もんじょ）

と呼ばれる。1000年の時を超え、中世の文書がそのまま保存された貴重な史料群である。内容も多岐にわたり、日記類、寺院聖教（しょうぎょう：中国、韓国、日本の祖師の教えについての文書）、政治・経済・社会に関する文書などに分類される。こういった当時の仏教関連文書、宮中行事の記録、荘園制における権利書等から、1000年前の日本、特に京都文化圏の人々の生活、知恵、思想を深く詳細に知ることができる。

#### <東寺百合文書の歴史>

江戸時代 加賀藩主前田綱紀が古文書の収集・保存を奨励し、東寺より文書を取り寄せ整理し、桐箱に入れて返却

18世紀 東寺の僧侶たちが、古文書の管理・保存を継続

戦後 京都府立総合資料館の上島先生のチームが目録を作成

#### <日本の中世史アーカイブ>

京都の寺院が所蔵する文書は内容も保存状態も素晴らしく、特に東寺は真言宗のバチカンのような存在である。海外ではすでに消滅している同時代の類似文書が、日本では今でも保存されている場合もあり、日本のみならず他国の中世文化を知ることができる貴重な研究資料となっている。東京大学史料編纂所のプロジェクトにより、東寺以外にも日本には多くの中世史料が存在することがわかった。中世の多くの日記や日次記（ひなみき）は約320点、写経・一切経は約4万点、聖教文書は京都の寺院だけで16万点残っている。

#### <世界の中世史アーカイブ>

このように膨大な中世文字史料を良い状態で保存している場所は世界でも珍しく、イタリアのメディチ家、ルッカ修道院、フランスの国立図書館など、ごく限られた場所のみである。

西洋における中世は史料の暗黒時代でもあり、多くの国で文書は政府所有となったり、戦い、弾圧、自然災害により消滅してしまった。そのような中、ローマ帝国崩壊後、一部の豪族や修道院によってのみ中世の史料が保存された。修道院は法律・規則に関する文書や写本を保存する役割を担っており、のちにキリスト教研究の重要な資料を提供することとなった。

東洋においては、インドで椰子の葉に記された写本が発見され、今後まだ見つかる可能性がある。韓国では高麗大藏経の木版史料が残っており、素晴らしいことにインターネット上で公開されている。中国の敦煌に関する史料は、発見した国が持ち帰ってしまったため一箇所に集約して研究はできていないが、インターネット上で公開されている。

### 〈なぜ日本に豊かな中世史アーカイブができたのか〉

京都は自然災害や応仁の乱を経験しているが、植民地支配を受けなかったこと、世界大戦中に戦禍を免れたことが大きかったと言える。さらに乱などの緊急時にも、様々な仏教宗派の僧侶たちが文書を安全な場所に移して保管した。移動に使用された道具はおそらくふみくらであったと考えられる。

### 〈中世寺社・公家・武家社会のプロソポグラフィ〉

百合文書とその他の京都周辺から収集・整理された膨大な史料群から、京都・東寺文化圏を発信元とした、関西・日本列島を越えた通集团的ネットワーク研究が今後広がる可能性がある。

プロソポグラフィとは、特定の集団のメンバーの系図と文書を組み合わせて、当時その集団がもっていたネットワークの特徴とその変遷を見る研究である。

### 〈提言〉

京都東寺百合文書がユネスコ世界記憶遺産に登録されたことは大変嬉しいが、これから先、自然災害や政治・経済の変化による影響を受ける可能性が十分あり、この文書の行く末を危惧している。まずは文書の質感など写真では残せない特徴もあるため、実物の保管が大切である。東京大学史料編纂所は史料の保存とインターネット上での公開を進めている優れた機関である。各機関ができることには限りがあるので、政府がこれらの文書の重要性を認識し、国を挙げて調査・保存に力を入れ、世界からも研究対象としてオープンにアクセスできる環境を整えて欲しい。用途により低解像度・高解像度のデジタル史料として保管することも良いであろう。またそういった史料は、国内に二箇所、できれば海外にも一箇所に保存しておくべきであろう。人類の知的宝庫を次世代に引き継ぐという共通の目的のもと、国際的に協力をしていくことが望まれる。

### 質疑応答

Q1. 日本の中世の古文書を研究する中で、最も感動したことは何か。

A1. 『更級日記』には、若い下流貴族の娘が、物語（例えば『源氏物語』）に対する憧れが強すぎて、仏教の教えとの間で葛藤する様が描かれている。そのように当時の人々の生活、文化、思想がわかること。

Q2. アレキサンドリアの図書館は貴重な史料を多く収蔵していたにもかかわらず、それらは消失してしまった。今ではユネスコなどの世界的な組織においては、史料保存の意識は高まっているのか？

A2. 日本による宣伝が不十分であるため、なかなか日本の史料への注目は得られていないの

が現状である。

Q3. ドイツの中世文学には、君主の妻への秘めた愛などの宮廷愛を記したミネザングというものが存在するが、日本の中世文学では、女性はどのように描かれていたのか。

A3. 女性も漢字を知っていたがひらがなを使って自分の気持ちを書いていた。『蜻蛉日記』など多くの日記が女性によって記された。社会的には、11世紀には相続権を有するなど、強い立場をもつ女性もいた。

Q4. 先生の、「史料へのオープンアクセスを可能にする」という提言について、現在百合文書の公開はどのようになっているか。フランスでは発行したものはすべて保存される。日本は出版社が自発的に国会図書館に提出したものは保存される。アメリカはどうか。

A4. 日本の古文書は各機関の権利や方針により史料の公開度が異なる。史料編纂所は古文書を活字に変換している。アメリカについては専門ではないのでわからない。

Q5. どういった経緯でこの分野に興味を持ち始めたのか。またプリンストン大学は現在大学ランキングでトップの大学であるが、プリンストンで学ばれて何が良かったか。学生がいるのでお聞きしたい。

A5. 16歳の時に鈴木大拙の禅についての本を読み仏教・禅に興味を持った。その後興味が移り、文化史に関心を抱くようになった。プリンストンは様々なバックグラウンドを持った学生を受け入れる大学で、勤勉な学生が多い。良かったのは、文系重視であることと、Gest 図書館。アインシュタインは Advanced study で学んだ。

Q6. 当時どのような目的で文書が記されたのか。どうしてここまで残ってきたのか？

A6. 日本は中心が弱い。個々の家や寺社においては古文書保存の意識が高かった。代々伝わる事物に敬意をはらい、次世代に残す目的があった。

## まとめと閉会の挨拶

国際言語文化センター 教授 金 泰虎

実は私も日本の中世史を専門に研究している。世界で日本の古文書を読むことができる外国人研究者は数えるほどしかいない。先生もそのお一人で、今日はグローバルな視点で史料・記録の残り方についてお話くださった。西洋や東アジア（中国、韓国）と比較され、すべてを網羅するのはエネルギーを要する作業であることが伝わった。

先生と私は着目点がやや異なる。先生は文書から宗教関係を中心に掘り下げ、一方私は寺社の経済構造や文書の残り方を考える。

百合文書は普通であれば「ゆりぶんしょ」と読む。これは加賀藩主前田綱紀が教養を示すために東寺から文書を取り寄せ、目録などを作成し、桐箱約100個に詰めて東寺に返却したため、「ひゃくごうもんじょ」と呼ばれるようになった。これは、江戸時代の武士たちが文人のような役割をしていたことを示している。東寺には百合文書、京都大学博物館が収蔵する文書、東寺に残された文書の3つの系統の文書がある。中世では、文書を「もんじょ」と読み、百姓を「ひゃくせい」（百の姓を持つ人：いろいろな人々の意味）と読んだ。

東寺百合文書といっても、すべてが文書とは限らない。記録には文書、経典、日記が含まれる。文書は命令系統によって発給されるので偽りがなく一級史料である。一方日記は、自分の感想などを述べ、相手に対し発給するものではないので二級史料である。経典はまさに記録である。

文書は一定の期間が過ぎれば破棄して良いものもあるが、破棄しなかったのには理由があったと考えられる。寺院には経典が保存されているため、定期的に収蔵物を破棄する習慣がなく、その中に一緒に保存された文書が偶然に残った可能性もある。

日本は神秘主義で、文書はなかなか公開されない。映写本を東京史料編纂所に行って見て推測するか、伝手を頼ってわずかな史料を閲覧するしかない。先生のオープンアクセスの提言は、本当に大切である。

昔は落雷で文書が燃える場合もあり、貴族の家には荘園の権利書などの文書を担いで逃げるためのふみくらがあった。今でも京都大学の博物館には残されている。

今日の先生のご発表から、グローバルな視点でどのように史料が残っているか学ばせていただいた。ありがとうございました。

(文責 吉田 桂子)